

昭和三十三年十二月刊行

新修広島市史

第四卷
文化風俗史編

広島市役所

広島電車唱
歌

氏、渡辺弥蔵によつて補修されたが、作詞・作曲者ともに明らかでない。また今も小学校唱歌の中に取り入れられている「みなと」は、宇品港をよんだものと一般に信じられているが、その作曲者は広島高等師範学校助教教授吉田信太明治三十五年九月より大正二年九月まで在任、音楽担当であつた。大正元年（一九三）広島に市内電車が開通するとまもなく、広島電車唱歌というのが矢田部藤吉によつて作詞されたが、それには次のような一節をはじめとして、順次市内の名所・旧跡とよみこんでいる。「芸術之友」二八号。

新に成れる 我市の 電車の人と 今日なりて 栄行く御代の 楽しさを いさもろともに 歌ひてむ

広島市歌

また同じころ同人の作詞、学習院教授納所弁次郎の作曲になる広島市歌があり、歌詞の第一節は左のごとくで、第二節以下広島「尚古」の歴史的発展をよみこんでいる。五〇号。

天正年間 輝元公 広島城を 築きしが 福島浅野と 世はかはり

王政復古の 御代に遭ひ 明治二十二の 長月に 始めて市制は 布かれけり

これ以後はしばらく広島市をよみこんだ歌曲は生れなかつたが、昭和四年の隣接七か町村合併、大広島市の実現にもなつて新たな広島市歌が作られた。それは畑耕一の作詞、陸軍軍楽隊長永井健子佐伯郡石内村（佐伯郡五日市町）の作曲になるもので、中国新聞社がおりから開かれていた広島市主催昭和産業博覧会に対して協賛する意味で制定し、四月十一日広島市に寄贈し、四月二十一日博覧会場内の音楽堂で発表した。その歌詞は次のようなものであつた。

広島市歌

1 蒼く真蒼まささをにむらだつ山の三つに囲みてつらなるところ
輝く空ぞ永遠ととはの光は われ等が眉に射照りもかへす

ここに生れて国の歴史を 遠く呼びつつ築かん八衢やちまた

その名ぞ広島― 衿持ほしりの郷土ふるさと 大き広島！広島！広島！

2 澄たまひみて真澄まじみにたたえる水の 七つに貫つらきながるところ

捲まき寄る海ぞ永遠の力は われらが胸にとどろもかへす

ここに生れて国の文化を 高たから呼びつつ飾らん八衢

その名ぞ広島―希望のぞみの郷土 大き広島！広島！広島！

昭和産業博
覧会宣伝歌

なおこの昭和産業博覧会を宣伝するために、それまで民間に流行していた「デカンショ節」・「鴨緑江節」・「ストトン節」・「磯節」・「都々逸」・「青柳」・「国境節」などにあわせた歌詞を作つて歌わせたことは、卑俗ではあつたが人々の耳に入りやすかつた。今「磯節」につけられたもの一、二をあげれば、

次のようなものがあつた「飽薇」。

三八号

広島名物お酒に鮎あやに かきに罐詰青海苔広島菜 飲んでたらふく食べて 見に行こ昭和博

広島名物縫針算筒 三篠枕さんせうまくらやかからかさふとん綿 世帯持せたいもちつには 行いかなきやならない昭和博

広島名所は比治山饒津 浅野御泉邸長壽園 天守閣てんしゅかくから一目に見えるは昭和博

広島音頭

このようなことが刺激になつたためか、この後は当時全国的に流行しはじめた新民謡や音頭が広島においても作られるようになった。それらのうち木下潤作詞・近藤十九二作曲の「広島音頭」はその代表的なもので、同氏作詞の呉音頭とともに昭和九年（一九三四）十二月太平洋蓄音器株式会社によつてレコードに吹きこまれ、新天座において発表会が行われた。左にその一節をかかげる。